

講演会開催報告

「血脇守之助の生涯と功績」

講師 金子 讓 氏（東京歯科大学名誉教授）

平成 29 年 4 月 22 日（土曜日）生涯学習センター アビスタ ホール

以下は企画展「血脇守之助 ～我孫子が生んだ歯科医学の功労者」にあわせて開催した講演会の要旨である。要旨の作成は杉村楚人冠記念館で行った。

ち わきもりの すけ
血脇守之助は、明治中期から昭和初期にかけて歯科医学教育と歯科医療制度を先導した教育者であり歯科医師である。本講演では歯科医学教育の面から話をさせて頂きたい。

血脇守之助は水戸街道我孫子宿の旅籠「かど屋」の 5 代目である祖父加藤栄助夫妻に育てられた。6 代目の母たきが 24 歳で亡くなり、婿の父が慣習で家を去ったためである。17 歳の時に叔父の芳松が「かど屋」を継いだため血脇家の養子となった。守之助は記憶力が優れ、漢詩を好み、体が大きい大変優秀な子どもであり、また温厚だったという話が残されている。我孫子小学校の 4 年の課程を 3 年半で卒業し、興陽寺で禅学を学ぶ。禅学の体験から、寺の性格を身にしみて生涯を送ったように感じる。また中野治四郎家の食客となって『日本外史』などを素読したという。ここは植物学者の中野治房博士が出た家である。明治 14 年 12 歳の時、英語を習いたいと勇躍上京する。この時、我孫子小学校校長杉山英が 15 円を贈って励ました。血脇は後に杉山の退職にあたって有志で基金募集をして支援し、杉山の逝去後には記念碑（大光寺現存）を建て、また夫人には送金を続けたそうである。

11 歳で上京した血脇は慶應義塾児童寮に入るが、粗野な生徒が多くて 1 年で辞めてしまう。血脇は学校に行ってはすぐ辞めてしまい、8 年の間に都合 8 校に入学し、最後は 19 歳で慶應義塾別科を終了した。この間血脇は予備門（後の第一高等学校）を 2 度受験した。学校の制度がまだ確立していない時期であるから、英語を勉強したり広く勉強したいと入学するが、気に入らないと辞めてしまうのであった。そして、血脇の決断は、子どもとは思えない程の速さで自分で何でも決めて行った。そのなかで、後に三井の大番頭といわれる池田しげあきや、建築家になる伊東忠太、ちゅうじょうせいいちろう（作家の宮本百合子の父）、それから軍人になる千坂智次郎といった、後に日本の近代化を引っ張るような人たちと友人になる。これは後年血脇の大きな財産になるのであった。英文学者で慶應義塾大学教授の宮森麻太郎は、この頃の血脇を、人望があり、旧友たちの間で最も優れた人物と見られていたと回想している。

血脇は新潟三条の米北教校で明治 23 年から 3 年間英語教師を務めた。同年は高山紀斎が高山歯科医学院を開校した年である。その間、中條に送ってもらった英字新聞に“Dentist”の広告を見て、三条で昵懇にしていた米国帰りの医師田原利や米国留学中の池田からも情報を得た。その結果 Dentist を志願し、高山歯科医学院に 23 歳で入学したのである。

高山紀齋はどんな人物かというと、もと岡山藩士である。質実剛健、進取の気性は藩風によった。戊辰戦争に従軍し、岡山藩が計画した海外留学の候補生であった。これは明治政府の方針で実現しなかったが、上京して慶應義塾に入り、さらに宣教師 C. カロザスの門人となり、英語を習って明治5年にアメリカに渡った。そして歯科医術を学び、歯科医術開業試験に合格して6年ほどで帰国した。その時は日本に歯科医師の資格はないため、内外科の医師免許で歯科医院を銀座に開業し、皇族など多くの患者の診療に従事して盛業であった。それにより資金が得られたので予てよりの志に従って芝区伊皿子に学校を創ったのである。

高山は、歯科医術開業試験の受験を目的に設立された学校とは異なって、歯科医師の育成に理念を持たせた歯科医学教育の先駆者である。高山より先行して開校した歯科医学校はいずれも数年で廃校、いつ閉鎖したか不明なものもあるほど、当時の歯科医学校経営は困難であった。高山も次第に学校経営が厳しくなり、10年継続したがもうダメかなというところで、血脇に学院を委譲した。血脇が30歳の時、歯科医術開業試験合格のわずか5年後である。その後、血脇が日本の歯科医学教育や歯科医療行政に顕著な功績を残せたのは、血脇の能力を見極めた高山の炯眼けいがんによるものと考えられる。

血脇が改名した東京歯科医学院の開校挨拶は、今日でも示唆的な内容である。大学は帝国大学が二つしかない時代に、早くも歯学博士が出てこなければならないと訴え、更に自分の学校では一般医学もしっかり修めた上で歯科医師になる様にするとともに、「医科歯科二元論」に立ちながらも、内務省の歯科医術開業試験には出題されなくても、一般医学をきちんと修めるのだ、と明言している。歯科医師になるには、歯科医学校修学が必須でなかった時代であり、非常に立派な挨拶だと思う。

1903(明治36)年に専門学校令が発令され、現在名門とされるいくつかの私立大学は各種学校から専門学校に昇格した。血脇の東京歯科医学院も1907(明治40)年に東京歯科医学専門学校に昇格した。専門学校生は兵役免除の特権を得る。そして、1910(明治43)年に最初の歯科医師法による文部大臣指定校になって、卒業生は国家試験を免除されるようになり、さらに社会的評価を高めた。しかし、1918(大正7)年の大学令公布によって事態は一変した。大学令は官公私立の総合大学(2学部以上)と単科大学の設立が認められ、高等教育を拡大させる画期的な改革である。ところが、大学の学部を8つに絞ったことから、除外された歯科、薬科、獣医科等は大学に昇格することが不可能となってしまったのである。

血脇は大学を作るのが最終目的であったから、ここで大きな問題に直面した。結局中身を充実させる以外に大学として認められる方法はないと血脇は考えた。そこで自身の私有財産であった東京歯科医学専門学校を寄付して財団法人とし、50万円の募金を集め、ゆくゆくは歯科大学にしようとしたのである。このとき、血脇は法人の理事長を血脇自身一代限りとし、子息縁者に継続させないことを禅寺に例えて明言している。

そして次に歯科医学教育事情を知るために、大正 11 年 8 月に及ぶ欧米視察に出る。アメリカでは歯科医学教育に大きな改革の波が押し寄せていた時で、血脇はその真っ只中の情報を得ることとなった。アメリカでハーディング大統領との会見や歯科医学教育改革の旗手ガイス教授と同席の歓迎会開催をアレンジしたのは、野口英世であった。帰国の翌年、関東大震災で視察資料は全て焼失し、一からやり直しになってしまった。そこで野口は再度資料を収集し、併せて被災した東京歯科医学専門学校に扁額を贈った。そこには「高雅学風徹千古」と書かれていた。高雅な学風は永遠に続くのだと、エールを贈ってくれたのである。後日血脇は、アメリカの歯科医学教育を基に歯科医学教育はどうあるべきかについて、立派な報告書を発刊している。

明治 29(1896) 年に血脇が会津に巡回歯科診療に行った時に、^{わたなべかなえ} 依頼元の渡部 鼎 医師の会陽医院で原書を読んで勉強に集中していた青年を見て、東京に来たら寄りなさいと声をかけたところ、野口清作が無一文で高山歯科医学院の血脇を訪ねてきた。その後、野口の志を成就させるための血脇の物心両面の支援は尋常ではなく、不思議な人間の繋がりの深さを感じさせる。この時、26 歳の血脇は野口の 7 歳年長に過ぎないが、野口は血脇を父とも形容している。野口に関する書籍は 100 種類以上あるが、^{わたなべじゆんいち} 渡辺 淳 一の『遠き落日』を読むのがいいかと思う。最初から最後まで血脇が影になって出てくる。と言うのは、野口は血脇に相当な数の手紙を出しており、それが小説の中で書かれているからである。

1949(昭和 4) 年に不況の最中にコンクリート 4 階建ての大きな校舎が竣工した。資金は同窓の寄付によるもので、設計したのは^{もりやままつのすけ} 森山松之助といって、中條精一郎の紹介で知り合った高山紀斎の義弟で、血脇が高山歯科医学院に入るきっかけを作った人物である。その竣工式の同窓会総会での血脇の挨拶がある。「もはや天命を果たした。明日死すとも可なり。歯科界の殿堂ができれば良いのであって、私個人の問題ではない」「私の本性はデモクラシーである。百姓である。殿様、地頭に反感を持っている。封建時代なら^{さくらそうごろう} 佐倉惣五郎である。少々言い過ぎかもしれないが私は感激し感謝している。今ほど嬉しいことはない」。大学として備えなければならない条件は、教員、学生、カリキュラム、財産、そして施設などの高い質である。その意味でもこの新校舎竣工には重要な意義が込められていた。

そこでいよいよ大学を目指して法律改正を再度働きかけようと考えていたと推測されるが、しかし時代は日中戦争から太平洋戦争へと進み、日本でのこの種の動きは全部停滞することになってしまった。そして終戦となり焼け野原になった後、連合軍の統治により、わが国に歯科や薬科の大学設立を文部省に認めさせた。血脇らが手塩にかけて育てた東京歯科医学専門学校は昭和 21(1946) 年 6 月に日本で最初の歯科大学(旧制)として昇格を果たした。それには戦前からの大学令が改正されることなく準用された。すでに引退していた血脇は、これを見届けた後の 1947 年 2 月 24 日黄泉路へと旅立った。享年 78 であった。

戦前の歯科医学教育は日中戦争前に最も隆盛になったと言える。戦前の歯科医学専門学校8校の全ては昭和初頭までに創立を終えていることがその理由である。日本大学専門部歯科（現日本大学歯学部）は医科設立より早い1921（大正10）年、東洋歯科医学専門学校と日本大学が合併することで、専門学校ながら初めて総合大学の歯科となった。最後が1928（昭和3）年の官立東京高等歯科医学校（現東京医科歯科大学）の設立である。世の中の進展に伴い、歯科医師は医師と同じように増えているが、最後に官立の学校が出来た。つまりそれまでの全ての歯科医師は、その後でもほぼ9割の歯科医師は民間が育成したのである。

そもそも江戸時代に、なぜ歯科は賤業とされていたか。歯科疾患は万人の病気だが、当時口中医は武家向きで、町人と縁が薄かった。しかし、歯抜きとか歯痛治めは必要だったので、それを香具師、つまりテキ屋とか露天商が行っていた。そのため、無くては困るが蔑みの対象だった。その意識は血脇が学校を継いだ頃にもあった。帝国大学を出た官僚にもその意識がずっと残っていて、富国強兵・殖産振興・官尊民卑という時代のなかで、歯科になかなか目を向けてくれなかった。そこに血脇が歯科医師の牽引車となって良い人材を育成し、歯科医師の身分向上によって国民の皆さんにいい医療をするため懸命になっていたのである。

血脇はどんな人物だったか。息子の日出男ひでおは「几帳面で物事をはっきりさせないと気がすまない性格で、自分が物事に処しては徹底するという信念は父からの教訓の賜物でした」「父親としては落第だった、お前たちは偉いひとにならなくても立派な人間になってくれ、紳士として世の中を渡って貰いたいとしみじみ申したことがございました」と述べている。血脇自身は自分が目標を決めたら、これが自分の義務であり責任だと思ったら、一心不乱に最善の努力をする、そこに利害や打算など考える余裕はない、もし「血脇イズム」というならそうあってほしい、と学生会報のインタビューで答えている。

血脇がなぜ日本の歯科医学に貢献できたかと言えば、優れた情報収集と分析力や英語力、管理・指導性など指導者としての能力に加え公平無私、義侠心という心情が大きな要因となっていたのではなかろうか。野口英世は借金魔という実とはとんでもない性格であり、借金を重ねるが、それでも眼を見張る才能と憎めない性格がある。それで血脇が遂には何といったかという、息子に「女には惚れてもいいが、男には惚れるな」と。自分は野口に惚れてしまったのである。だから野口の将来を信じて際限なく支援をした。こういう見返りを求めない義侠心が人を惹きつけたのではないかと思う。

最後に血脇の人生訓を紹介する。「世の中は五分の真味に二分侠気、あとの三分は茶目で暮らせよ」。五分は真剣にやって、あと二分は人のために、そして三分は楽しもうじゃないかと、人生のバランスを大切にしたのである。私もこの様にありたいと思っていることから、まさしく血脇守之助の薫陶を強く受けていることになると思う。